

アフリカ豚コレラの懸念されるリスク

取締役食農リサーチ部長 北原克彦

1 中国への侵入

報道・公表されているとおり、中国では2018年8月3日に遼寧省でアフリカ豚コレラ(African Swine Fever、以下「ASF」)の1例目が確認されて以降、10月31日現在65か所(57農場、2施設、6村)まで発生農場等が増えてきた。

ASFはアフリカ豚コレラウイルスによる、豚やイノシシに感染する伝染病であり、ヒトには感染しない。症状はさまざまであるが、高熱、食欲不振を呈し高い致死率と強い伝染性を持つ。ウイルスは非加熱のハムや冷凍された肉でも比較的長期にわたり生存し、感染ルートはウイルスが混入した食品残渣の飼料給与、媒介するヒメダニや感染動物等との接触などによる。豚が感染してもウイルスに対する中和抗体が産生されないので、ワクチン開発ができず有効な予防薬や治療法はない。

中国で分離されたウイルスのDNA配置は、ジョージア株、ロシア・イルクーツク州株と一致しているものの、侵入ルートは判明していない。中国は小規模養豚場が多いこともあって、オーエスキー病・PED(豚流行性下痢)・PRRS(豚繁殖・呼吸障害症候群)が広がり、さらに豚コレラ・口蹄疫も存在するため、病気との長期戦のなかで混迷を深めている。

2 イノシシは止まらない

—欧州の感染拡大—

欧州では1957年以降、航空機や船舶の食品残渣などを豚に給与したことによって、アフリカからASFが侵入したが、封鎖・淘汰を行いサルジニア島(イタリア)を除く地域から撲滅さ

れた。しかし、07年に黒海沿岸のグルジア(ジョージア)へ侵入したものは、ロシアやアゼルバイジャンの野生イノシシへ感染。東欧の小規模裏庭養豚と野生イノシシが伝播要因となって、ゆっくりと西方へ拡散している。

14年にポーランドへ侵入、同国東部ではこれまで野生イノシシを中心に3千件近く発生した。17年にはチェコへ侵入、さらに逆方向のロシア東部・イルクーツクへもジャンプした。18年4月にはハンガリーへ侵入、日本のハンガリーからの豚肉輸入量は2万トン(17年)であるが、日本を含む各国が輸入禁止措置をとり、ハンガリーの国宝と呼ばれるマンガリッツア豚肉も一時輸入停止となっている。直近の18年8月には養豚大国ドイツ・フランス・オランダと国境を接しているベルギーへジャンプし、すでに野生イノシシで73件発生している。

自由に国境を通過してしまう野生イノシシは、ユーラシアでの感染拡大の最大のリスクだ。活発に動く夏場に野生イノシシのASF発生が多く、撲滅は困難になってきた。農場では死亡家畜の保管をしっかりと行い、野生動物を近づけないようにしなければならない。北欧の農場のなかには、野鳥対策として周囲の木を伐採し、イノシシよけの二重の柵を設け、イノシシ駆除の契約を猟師と行ったところもある。

3 日本の水際防疫と農場対策

インバウンド、外国人技能実習生など外国人の往来が多くなっており、日本では水際防疫が重要だ。動物検疫所は家畜伝染病予防法

に基づき水際で検疫措置を行っている。

中国からのエアラインや国際クルーズ船と協力して、一般旅行者に対し肉製品や動物由来製品の持込み禁止と、畜産農家へ近づかないように注意を喚起。一部違法に持ち込まれる携行品(肉製品)対策は、家畜防疫官による口頭質問や、検疫探知犬の活動強化だ。また、海港ではフェリーや貨物船が畜産関係車両を搭載した際の消毒、厨芥処理事業者へ適切な処理を指示した。10月に北京から新千歳空港へ到着した旅客の携行品(豚肉ソーセージ)から、ASFウイルス遺伝子が検出されており、気が抜けない状況だ。

一方、農場対策は、加熱工程の無い飼料原料・添加物にウイルスが付着して持ち込まないようにすることだ。行政当局が注視しているのは、エコフィーディング(食品残渣等利用飼料)に取り組んでいる農場で、汚染の可能性のある食品残渣の取扱いだ。生肉等の混入可能性があるものは、飼料安全法に基づいて70℃・30分以上もしくは80℃・3分以上の加熱処理等を指導している。

中国・アジアからの外国人技能実習生が一時帰国した場合は、再入国時の防疫措置や食品の持込みにも注意が必要だ。また、農場の衛生管理区域への部外者立ち入り制限、トラック洗浄の徹底、死亡家畜に野生動物が近づかないように、コンテナなどへの適切な保管が求められる。

万が一発生した場合は、畜産・食肉業界への影響が大きいことから、日本では家畜伝染病予防法で、患畜・疑似患畜の速やかな届出と、と殺が義務づけられている。ワクチンが無いので、発生時は感染豚の処分までの初動が重要だ。埋却が基本だが場所を確保できない場合に備えて、移動式レンダリング装置を農林水産省は整備した。

4 グローバル化した養豚・食肉流通の弱点

日本の養豚は病気との戦いの歴史でもある。海外から侵入した病気が増えており、グローバル化した豚病の伝播動向を獣医療関係者は注視している。仮に、ASFが日本へ侵入すれば、輸出施設を整備し、認定を受けてようやく年間600トンを超えてきた豚肉輸出も一時停止となってしまう。また、日本の豚肉需要180万トンの半分は輸入で対応している。主要輸入国はアメリカ・カナダでシェア5割を占め、EU産は2割でデンマーク・スペインが多い。欧州でASF感染が拡大すると、加工向け原料肉輸入だけでなく、高級生ハムや加工品、種豚にも影響がでてくる。

そして、世界の豚肉貿易市場に目を向けると、17年の豚肉総輸入量は789万トン(USDAによる)で、総生産量1億1,103万トンの7%にすぎない。貿易市場の底が浅いのに、突然サプライチェーンが途切れてしまうリスクを抱えているのだ。

中国は世界最大の豚肉生産国であり輸入国でもある。ASFによる殺処分は13万頭(OIE報告)に近づいてきたが、まだ4億頭規模の飼養頭数の一部にとどまっている。中国はASFを封じ込めることができるのか、この厳しい戦いを世界は注視している。

<参考文献>

- ・小澤義博(2014)「アフリカ豚コレラの歴史とリスク分析」『獣疫学雑誌』
- ・農林水産省 消費・安全局動物衛生課「アフリカ豚コレラについて」
<http://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/asf.html>
- ・農林水産省 食料・農業・農村政策審議会家畜衛生部会
<http://www.maff.go.jp/j/council/seisaku/eisei/>
- ・国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構「アフリカ豚コレラ」
<http://www.naro.affrc.go.jp/niah/asf/index.html>

(きたはら かつひこ)